

女性部が担う地域ぐるみの水産キャリア教育

種市南漁業協同組合 宿戸女性部
高屋敷 恵美子

1 地域の概要

私たちが住む「洋野（ひろの）町」は、岩手県の最北部、青森県との県境に位置する人口1万5,000人ほどの町である。洋野町には5つの漁協があるが、全ての地区で採介藻漁業が盛んで、特にウニが特産となっている。毎年開催されるウニまつり（今年度は中止）では全国から約2万人が訪れる。



図1 位置図

2 漁業の概要

私たちが所属する種市南漁業協同組合は、組合員数243人、水揚げ額は約8億円（平成30年度）であり、水揚げの約7割は定置網等によるサケや鮮魚、カゴ漁業によるタコ類となっている。

洋野町には干潮時に200mほど干出する平岩盤が広がっており、そこに「増殖溝」と呼ばれる幅4m、深さ1mほどの溝を掘っている。増殖溝には餌となる海藻類が流れ込む仕組みになっているため、ウニやアワビの非常に良い漁場となっている。また、増殖溝周辺は比較的波が穏やかであり、安全にウニ漁を行うことができる。そのため、ウニやアワビの生産額は全体の約3割を占めるようになっている。

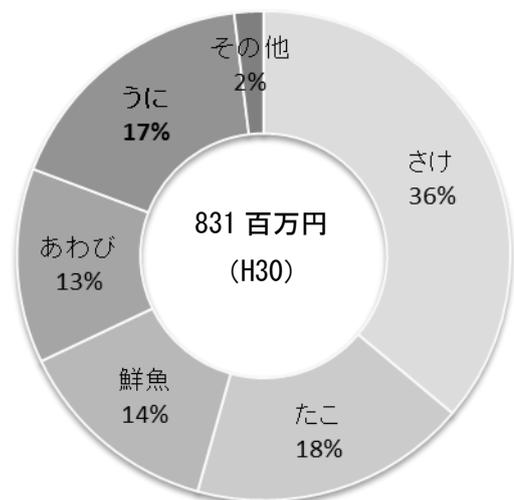


図2 生産額

種市南漁協では、増殖溝周辺の安全な漁業環境があることに加え、一家族に複数の人が正組合員資格を持つことを積極的に進めている。また、干潮時の増殖溝周辺は女性や高齢者の専用漁場となっており、ウニの漁期にはその場所で女性が先行して漁獲ができるルールになっている。そのため、女性が自分で漁獲して自分の収入にできる環境が整っている。

3 女性部の活動と運営

宿戸（しゅくのへ）女性部は昭和 34 年に宿戸漁協女性部として結成された。その後漁協合併等を経て、現在では会員 62 名、役員 9 名の（令和元年度）の体制で活動を行っている。女性部では、①貯蓄推進活動、②共済推進活動、③合成洗剤追放運動、④各種講習会、⑤環境衛生活動、⑥研修旅行、⑦その他の活動（担い手対策活動、イベント参加）などを行っている。

4 実践活動の取組課題選定の動機

（1）背景

宿戸地区でもかつては浜で遊ぶ子供たちが多く見られていたが、昭和 50 年代に増殖溝が完成して以降、密漁監視などの管理体制を厳しくしたこともあり、浜で遊ぶ子供たちもほとんど見られなくなっていた。

浜の楽しさを知らないままでは、将来の浜を支える人が育たない、そのような危機意識を持っていたところ、当時の振興局水産部などからアドバイスを受け、平成 17 年度から地元の小中学生などを対象とした体験学習等に取り組み始めた。

（2）実践している漁業担い手育成活動

現在、宿戸地区では、小学生から高校生にかけて、切れ目なくそれぞれを対象とする体験学習などを実施しており、女性部では主に中学生に対しての体験学習を担っている。また、地域ぐるみで行っているウニ直売会やウニの森植樹祭などにも小中学生が参加しており、担い手育成の一環となっている。

表 宿戸地区で実施している漁業担い手活動

対象	目的	内容
小学生	漁業や生物に興味を持ってもらう	・稚ウニ放流体験 ・水産教室（磯観察、試食） ・ウニの森植樹祭
中学生	漁獲、加工から販売までを体験し、収入につながる楽しさを知ってもらう	・ウニ漁獲、加工体験 ・さけトバづくり ・修学旅行、直売会での販売体験
高校生	進路選択に向けた基礎知識の取得や意識付け	・種市高校と連携した実習 ・直売会での販売体験

5 実践活動の状況及び成果

（1）体験学習

①ウニ漁獲、加工体験

ウニ漁業の体験では、中学生は漁獲からむき身、塩ウニづくりの加工、瓶詰めまでの工程を3日間かけて体験する。1日目に中学生たちは宿戸地区の増殖溝からウニを漁獲する。漁獲作業には宿戸研究会の他、種市高校海洋開発科の生徒さんにも協力いただいている。2日目に自ら獲ってきたウニを女性部員に教わりながらむき身にし、塩漬け作業を行う。3日目に塩付けしたウニを女性部員に教わりながら瓶詰め



図3 ウニ加工体験の様子

し、自分たちでデザインしたラベル貼りまでを行う。体験に参加した中学生からは「空気を入れないように詰めるのが難しかった。食べた人に洋野のウニが一番おいしいと感じてほしい」といった感想も寄せられており、とても記憶に残る体験になっていると思う。

②サケトバ作り体験

毎年秋にはサケトバ（サケを皮がついた状態のまま縦に細く切り、乾燥させた加工品）作り体験も実施している。中学生は各自サケを女性部員に教わりながらさばき、サケトバに加工する。多くの生徒がサケをさばくことは初めてで、最初は恐る恐る触るものの、中には2本・3本さばくうちにかなりうまくなる子もいた。



図4 サケトバ作り体験

これらの中学生に対する体験学習は、これまで地元の宿戸中学校の生徒を対象として行ってきたが、令和2年4月に

宿戸中学校は種市中学校と統合となり、対象の生徒数も大幅に増えた。そのため女性部では、対応する部員を増やして、体験学習を継続している。

③販売体験

体験学習で作った塩ウニやサケトバは、冷凍保存しておき、東京に修学旅行に行った際に、岩手県のアンテナショップである「いわて銀河プラザ」で販売を行っている。今年度はコロナウイルスの影響で、修学旅行での販売体験はできなかったが、体験学習で作った塩ウニやサケトバは、学校の文化祭で生徒による販売を行った。

また、宿戸地区では、平成 17 年から宿戸のウニの良さを直接消費者に伝え、収入の安定を図るために「ウニ直売会」を開催している（今年度は中止）。女性部もいちご煮などの地元料理を出店し、毎年 40 万～50 万円程度の売り上げがある。対面で会話しながら販売することにより、来店客に対して「地元ではこのようにして食べています」という食べ方の提案にもなっていると感じている。

平成 20 年からは、この直売会の販売を地元中学生にも手伝ってもらっている。初めの年は希望者 3 人のみの参加であったが、年々イベントに参加する楽しさが口コミで広まり、近年では 20 人以上の中学生や中学校の卒業生である高校生が参加するようになっている。直売会には地域の方も多くスタッフとして参加していることから、参加している中高生にとっても、単なる販売の体験だけではなく、地域の一人としての意識を持つことのできる場になっていると感じている。また、来店客にも好評であり、中学生の接客でつい財布のひもが緩む方もいるようである。



図 5 修学旅行での販売体験



図 6 直売会での販売体験

④ウニの森植樹祭

ウニの餌となるコンブ等の育成に必要な栄養を山から海に送り、良質なウニを育てることを目的に、町内の漁協や洋野町など関係機関が連携して、平成 19 年からウニの森植樹祭を実施している。植樹祭には毎年地元の小学生が参加して植樹活動を行っている。女性部では毎年参加者に対してウニのお吸い物の提供も行っており、好評を得られている。

⑤小学生へのウニの魅力授業

今年度はコロナウイルス対策のため実施できなかった取り組みも多いが、一方で今年度から始めた新たな取り組みもある。宿戸小学校の課外授業に月に 1 回ずつ、合わせて 3 人の女性部員が講師として招かれ、それぞれ 1 時間ずつ宿戸のウニの魅力について講義を行った。1 回目がウニ料理やウニのおいしさについて、2 回目はウニの取り方や生態、加工の方法、3 回目は女性漁師になった理由や漁業の楽しさについて、質問を交えながら話をした。

それぞれの部員の視点で得意な分野を中心に話をすることで、小学生にも宿戸のウニ

のさまざまな魅力を伝えることができたと思う。また、女性部員にとっても1時間の講義を務めるのは初めての経験だったが、小学生に教えることで自分たちの勉強にもなり、自信にもつながったと感じている。



図7 小学生へのウニの魅力授業

(2) 新たな担い手

これらの体験学習等に参加した生徒の中から、これまでに5人が宿戸地区の漁業者として就業し活躍を始めており、中には一度、町外に就職したものの、宿戸に戻ってきて、漁業者となった方もいる。

また、昨年度に県等で運営する「いわて水産アカデミー」が開講した。これは、漁業就業者を確保し、地域水産業のリーダーとなる担い手として育成することを目的として、県が開講したもので、昨年度は7人、今年度は8人が研修を受講している。その「いわて水産アカデミー」の第1期生として、昨年度、体験学習の卒業生からも1人が参加した。彼は、現在「いわて水産アカデミー」を修了し、定置漁業の乗組員として、漁業者としての第一歩を踏み出している。

「漁業は努力が成果に結び付くため、やりがいを実感できるのが魅力」と語っており、今後、漁業者として活躍してくれることと思う。

6 波及効果

このような宿戸女性部の活動を通じ、また、宿戸地区の女性の漁業への参加のしやすさから、前述の5人の方以外にも、地域の若い女性の中から漁業者として、女性部員として活躍する方が現れるようになってきた。

今年度は2人の若い女性が漁業者としてデビューを飾った。ひとは、地元洋野町出身で、お母さんやおばあさんがウニ漁をやっている姿を見て自身もウニ漁への参加を希望するようになった。現在、子育て真っ最中のお母さんでもあるが、漁業者として活躍している。もう1人は、近隣の久慈市出身であるが、幼い頃からウニ獲りに憧れを持っていて、ウニ漁をやりたいと旦那さんを説得したそうだ。念願かない、今年度から正組合員となってウニ漁をはじめている。2人とも意欲をもって漁業に取り組んでおり、今

後の活躍が期待される。

また、女性漁業士も以前は地区に一人だけであったが、新たに2人が漁業士になり、活躍している。

7 今後の課題や計画と問題点

宿戸地区では、独自の担い手育成を行っており、女性部も多く参画している。その取り組みの結果、宿戸地区に新たな担い手が生まれるようになってきているほか、漁業者として、女性部員として活躍する若い女性も生まれている。

若い方が継続的に宿戸地区へ漁業者として入ってきてくれることにより、若い人が得意とするSNSなどの新しい情報発信手段によって、宿戸の水産物の認知度向上につながっていけばよいと考えている。

宿戸地区では、これまでウニの資源管理による品質向上と併せて、直売会の開催などを通じてウニの評価や知名度の向上を行ってきた結果、ウニについては高い評価が得られるようになってきており、地域の宝ともいえる存在になっている。

一方で、食材としての可能性は高いのに、いまだ知名度が低く、限定的な評価となっているマツモなどの水産物もある。宿戸地区のこれからを担う若い方々には、そういった可能性のある水産物についても、ウニと同じような高い評価が得られるよう、新しい方法や考え方を取り入れて、価値の向上に取り組んでもらいたいと思う。